総合教育研究センター
学生向け情報誌
クレードル
第３号
Center for Research And Development of Liberal arts Education
3rd issue

CRADLE

教員を目指すあなたへ

現役教員からのメッセージ(1)

座安　可那子(沖縄県那覇市立首里中学校教諭)

天理大学の学生のみなさんこんにちわ。

私は昨年度沖縄県の採用試験に合格し、今年から中学校で保健体育の教員をしています。中学校の現場がはじめてに近い私にとっては、毎日の日常が目まぐるしく過ぎさってしまうほど仕事におわれています。しかし、学ぶことの多い日常に、楽しさややりがいを感じはじめている今日この頃でもあります。

大学のはじめは、体育の先生になりたいという思いだけで沖縄から本土にやってきました。飛行機や電車の乗り方もわからない、さらに言葉も通じない本土の生活にカルチャーショックを受けて、夢を描きながらもこんなはずじゃなかったと一人葛藤していました。

そんなとき、大学の授業で、原田先生という一人の先生に出会いました。 先生の授業を受けさせてもらっていくうちにこれでは、せっかく大学に出させてもらっている親に申し訳ないという熱い気持ちになり、本気で勉強をしようと決心しました。 また、原田先生を通して、沢山の素敵な先輩方にも出会えることができました。

「出会いが人を変える」まさに、そのとおりだなぁと身にしみて実感したのを今でも鮮明に覚えています。

本土の大学に来たことを後悔し４年間本当に長いと感じていたはじめのころのわたしが、卒業した今天理大学で学べることができて楽しかったと思えることができるようになったことは、人として一歩成長することができた証しのような気がしてとてもうれしく思っています。

「出る杭は打たれる」という言葉がありますが、みなさんは知っていますか？新しいことをしようとしたり、みんなとちがうことをしたりしたら叩かれるという意味です。わたしも今思えば、まさにその経験をさせてもらいました。しかし、この言葉には続きがあり「出すぎた杭は磨かれる」ということです。

試験に合格して今年現場で働いて感じることは、あのとき自分の夢を諦めずに進んでよかったなと思うことと、この言葉を実際に体験することができてよかったなと思うことです。夢をかなえることに本気になり、さらに学び続ける姿勢はどの年齢になってもとても大切なことではないかと思います。

天理大学には、学生のみなさんのためにさまざまなプロジェクトがあります。学部、学科に関係なく、興味があったり、やってみたいなと思ったらぜひ思いを行動に移すことのできる人になってほしいなぁと思います。大学の先生方のお力をどんどん活用して、ぜひ夢をかなえてください！

後輩の今後の活躍を心から応援しています。

第３号の内容

PP.1-2　教員を目指すあなたへ
P.3 こころの健康法
P. 4　台湾ってどこにあるでしょう？
P.5「國體」から「国体」？
PP.6-7 特集「世界記憶遺産」－山本作兵衛の炭鉱記録画－
PP.8-12　オーストラリア版「森に生きる」報告

現役教員からのメッセージ(2)

福西　穂高(奈良県宇陀市立菟田野小学校教諭)

みなさん、はじめまして。平成 20 年に天理大学を卒業し、現在小学校に勤務している福西穂高といいます。まず、かんたんに私の経歴を紹介します。

平成 16 年４月	天理大学入学	国際文化学部アジア学科中国語コース
平成 20 年３月	天理大学卒業	高一種教員免許　外国語〈中国語〉取得
平成 20 年４月	佛教大学通信教育学部入学	
	天理大学科目等履修生	
平成 21 年３月	小二種教員免許取得	
	中高一種教員免許　外国語〈英語〉、保健体育　取得	
平成 21 年４月	カナダ留学	
	サスカチュワン州リジャイナ大学 ESL プログラム	
平成 22 年４月	大和高田市立高田西中学校非常勤講師	
９月	奈良県採用試験１次合格	
平成 23 年９月	奈良県採用試験２次合格	
平成 24 年４月	奈良県宇陀市菟田野小学校にて採用	

今こうして、学生の皆さんに向けてコメントを書いていますが、これまで特別なことをしたわけではありません。正直なところ、ストレートに教師を目指していたわけでもありません。こんな私ですが、少しでも私の話で皆さんの役に立てれば光栄です。

教師になったきっかけは、学生時代に親父から「教員免許を持っていればいつか身を助ける。だから取っておけ。」という指摘をうけたことでした。ここで少し親父の話をさせてもらうと、自然(特に山）が好きな親父で、いつも自分の考えを行動で示してくれる親父です。私は５人兄弟の次男で、兄弟みんな山に関係のある名前がつけられています。私たちが小さい頃から山や川、キャンプによく連れて行ってくれました。大学１年生の頃には、北海道で「青少年自然の家、ボランティアスタッフ養成講座３日間」というものがあり、勝手に私の名前で申し込み、「いってこい。」ということもありました。最近では、東日本大震災直後に東北にボランティアで入りました。私も親父に続き、少しでも役に立てることはないかと現地に入りました。すぐ近くにそんな行動力のある親父がいたことが、現在のアクティブな私につながっていると強く感じています。

話を戻しますが、私は教員免許を取り終えるまで５年を要しました。天理大学に佛教大学、すべてを取り終えるまでに、たくさんの経験とたくさんの人との素敵な出会いがありました。当たり前のことですが、人の数だけ様々な考え方があることを思い知らされました。同時に私はまだまだ自分というものを持てていないと気づかせてくれることにもなりました。

そんな私から皆さんにアドバイスするならば、今の学生の期間にしっかり遊んで、いろんな経験をしておくべきだということです。遊びといっても、テレビゲームをするという事ではなく、スポーツや旅行、芸術鑑賞などから刺激を受けるということです。日頃生活する中で触れない世界に飛び出していくということは、自分の考えの視野を広げてくれるものになります。そういう意味では、天理大学というところは、とてもおもしろいところです。語学に力を入れていることから、学内にたくさんの外国人留学生を見かけるし、また学生による交流ができるイベントも多々あります。積極的に参加して交流してみてはどうでしょうか。ちなみに私が在学中に受講したもので、「森に生きる」や「国際参加プロジェクト」は特にオススメです。他者とのコミュニケーション、仲間づくりなど今の教育現場で必要とされる能力は、ここでスキルアップできたと感じています。教師を目指すにあたって是非とも受講していただきたいものの一つです。

最後に、「あなたの魅力を教えて下さい。」と問われて、とっさに答えることができるでしょうか。魅力とは、楽しいことだけでなく嫌なことや苦労をすることで磨かれます。嫌なことから逃げず、どんどんチャレンジしていってもらいたいと思います。教育現場では教師が働き辛いような環境があったりもします。少しのことでは動じない“強い自分”を学生の今の期間につくってください。採用試験をパスするには勉強することはもちろん必要です。勉強もしっかりしてほしいと思います。

Do your best!!

こころの健康法ー話せる相手をもちましょう！

仲　淳(人間学部総合教育研究センター教職課程)

私たちは日々を生きていく中で、ときにいろいろなしんどいことや困ること、あるいはとてもつらくてかなしいことなどにも出会います。そういう時、みなさんはどうされていますか？

自分一人で抱えて耐えて努力して、という人もいるでしょう。気晴らしにいろいろな他のことをする、という人もいるかもしれません。

苦しいことやつらいことの乗り越え方は人それぞれ、そしてその時々だろうと思います。でも、しんどいことがずっと続くと病気になってしまったりすることもあるので、注意が必要です。いわゆるストレスがたまって、ということなのですが、このストレスというものが、実はとても多くの病気の発症に関わっているということが、現在よく知られています。やはり常日頃からの用心は大切なわけですね。

今日はそのような日々のストレスに対処する方法として、みなさんが日々何気なく使っていながら、意外にあまり自覚はしていないという、一つの方法を紹介したいと思います。

それは、「**だれかに話を聴いてもらう**」という方法です。

え？なんでそんなことが？と思われる方もいらっしゃるかもしれませんが、実はこの方法はかなりの威力をもっているのです。

「愚痴をこぼす」という言い方をした方がわかりやすいかもしれないのですが、人間は困った時、しんどい時、つらい時、その苦しさをだれかに少しでも受けとめてもらえると、どうもそれだけでちょっと気持ちが楽になる仕組みになっている生き物のようなのですね。「ねえねえ、ちょっと聞いてよー」と言ってバーっと話すとなにかホッとした、という経験はみなさんにもきっとあると思いますし、カウンセリングや心理療法というものも、実は基本的には人間のこの性質を利用したものなのです。しんどさや苦しさをちょっとよそに「こぼす」ことによって、マンパン状態の心の防波堤が決壊してしまうのが防がれるわけなのですね。

ある有名な精神科医のお医者さんは、「話すは離す(放す)である」というふうに言っておられます。人は悩みやしんどさを人に話すと、その悩みやしんどさからちょっと距離を置いて離れることができるようなのですね、どうも。だれかに話を聴いてもらって、「そうなんだあ。それは大変だね。しんどいよね」と言って受けとめてもらえると、人は自然に力が出る生き物なのです、どうやら。

「しあわせは分け合うと二倍、かなしみは分かち合うと半分」という現象が(これはちょっとおおげさかもしれませんが)、どうも心の世界では起こるようなのですね。(僕はこれを「心の共鳴増幅の原理」というふうに名づけてみようかと思っています。)

ですので、みなさんもしんどいことやつらいことがあったら、どうぞ身の回りの「この人なら」という人にちょっと話しかけてみて欲しいと思います。すると少し気が楽になって、ふと気がつくといつのまにかまた前に進む活力が湧いてきていた、というふうになることがあると思いますので。

「寒いね」と話しかければ「寒いね」と答える人のいるあたたかさという俵万智さんの短歌があります。寒さも分かち合えば心のぬくもりに変わる、という意味の句だと思います。

しんどい時、苦しい時、つらい時は、分かち合っていきましょう。そして、うれしい時、楽しい時は、ともに喜び合いましょう！

台湾って、どこにあるでしょう？

山本　和行(人間学部総合教育研究センター教職課程)

昨年８月から、天理大学と交流協定を結んでいる台湾の中国文化大学に交換教員として滞在しています。ちょうど良い機会なので、学生のみなさんに台湾のことを知ってもらいたいと思い、この CRADLE に文章を書くことにしたのですが、はたと「何を書こうか」と悩んでしまいました。

ありきたりな台湾紹介を書いても取り立てて面白いことはないだろうし(本屋さんにあまたあるガイドブックやエッセイ本を読んでください）、研究に関する話は難しくなりがちだし(自分の専門ですから下手なことは書けないのです）、こちらの学生さんのことや授業のことなどはいろいろ面白い話もあるのですが、あれこれ書くと、到底紙幅が足りないし(表現力が足りないとも言います）。あ、そうそう、WBC(World Baseball Classic）の日本×台湾戦の盛り上がりはこちらでも大きく報道されていましたし、東日本大震災をめぐる心温まる話もあるのですが、それなら僕が書かなくてもという気持ちもあるし…そう考えると、なかなか難しいのです。

そこで、いろいろ考えて、なんとなくこんなことを書いてみます。

台湾って、どこにあるでしょう？みなさんはどう答えるでしょうか？答えられますか？

僕がよく聞くのは、「沖縄の少し南です」でしょうか。位置関係としては沖縄本島の西南西あたりですから「南」というのは正確ではありませんし、「少し」というには結構距離があるのですが、沖縄も台湾も「南国」というイメージから、いちばんピンときやすい答えなのではないかと思います。

僕はこの問いに対して、「フィリピンの北にあります」と答えるようにしています。

…ピンと来ないかもしれませんね。では、地図を広げてみてください(…と書いて、最近は地図なんて広げないですよね。地図のアプリを開いてください、でしょうか）。台湾から見ると、フィリピンはすぐ南にあります。台北からフィリピンの首都マニラまでは、台北～大阪よりも断然近く、台北～那覇や、対岸の香港までの距離とほぼ同じです。台北～大阪と同じぐらいの時間をかければ、マレーシアやベトナムにも行くことができます。

日本から台湾の位置を説明しようとするとなかなか思いつかないことですが、東南アジアの国々との地理的な近さは、台湾にいるといろいろと実感します。たとえば、台北駅の地下にはいくつもの地下街が広がっていますが、そのうちのひとつである「台北地下街」は、台湾の人々に交じって、たくさんの東南アジア系の人々で連日にぎわっています。台北の中心地とは思えないぐらい安い値段で服などが並び、インドネシア料理の店やフィリピンの食材を扱う店、東南アジア各国でよく見る携帯電話販売の店などが軒を連ねています。台北駅のターミナルビルや周辺にも東南アジア系の人々、とくに若い人たちが集まって、なんだか楽しそうにしゃべったり、ゲームをしたりしています。

また、MRT(中国語で「捷運」、日本の地下鉄に近い）に乗ると、東南アジアの国々から来た(と思われる）女性が車いすに乗った台湾人のおじいさん・おばあさんを押して乗ってくる様子をよく見かけます。彼女たちと直接話したことがないのでわかりませんが、車いすのおじいさん・おばあさんの息子のお嫁さんなのかもしれませんし、出稼ぎで来ているのかもしれません。前者の場合は「外籍新娘」(「外籍」は外国生まれ、「新娘」はお嫁さん）として社会的に認識されていますし、後者の場合は少子高齢化が進む台湾での介護福祉分野への外国人労働者の流入が定着してきています。

僕が今教えている文化大学の日本語学科にもマレーシアから来た学生さんがいて、日本語を学んでいます。その学生さんは普段、同じマレーシアから来た友人とマレー語で話しながら、日本語学科の台湾人のクラスメイトとは中国語で話し、大学の専攻として日本語を勉強しています。そういえば、僕が台湾に留学していた十数年前にも、ミャンマーから来て日本語学科に所属していた学生さんと知り合いました。そうした学生さんが台湾人の子どもたちと同じように教育を受けることができるほどに、彼ら・彼女らは社会の構成員として認識されているということなのかもしれません(もちろん、そのなかでもいろいろな「壁」があるだろうということは想像に難くありません）。

みなさんが持っている「台湾」のイメージとは、また違う「台湾」の姿がここにはありませんか？こうした雑多なありようが、台湾の面白いところであり、またなかなか難しいところでもあります。具体的に何が面白くて、何が難しいのか。それは、ぜひ台湾に来て、見てみてください。きっと、日本の「当たり前」が当たり前ではないことを実感する、という興味深い経験をすることができますよ。

「國體」から「国体」？

小田　健(人間学部総合教育研究センター)

別にプルースト[1]を気取るつもりはないのだが、授業をしながらふとしたきっかけ(マドレーヌではないが）から何十年も前のことを想い出して短文を書いてみる気になった。

その「きっかけ」とは次のようである。「収容所に於ける俘虜殴打等に関する裁判記録を読んで奇妙に思うのは、被告が殆ど異口同音に、収容所の施設改善につとめた事を力説していることである。(中略）彼等は待遇を改善すると同時になぐったり、蹴ったりするのである」。これは、丸山眞男[2]が先の敗戦後の戦犯裁判での日本人被告の言動を通じて旧日本軍の癒しがたい病理を暴いてみせた論文の一くだりである。

日本軍国主義を温情と嗜虐の奇妙な共棲の構図で分析する手法は、この丸山論文出現当時は新鮮であったかも知れないが、現在の我々にとっては自明の、とまでは言わないにしても、ごく普通の説明手法になった観がある。のみならず、この図式が適用できるのは戦前戦中の日本軍国主義に限ったものでもなく、現代社会の様々な出来事がこの図式で説明可能だというのが我々の共通理解のようである。丸山論文のこのくだりを、2012 年度秋学期の政治学の授業最終回で受講生に聴かせながらの私の「想念」は、「変わっていないな、相変わらずかも知れんな」というものであった。

私がまず連想したのは実はこのことではない。今から数十年前のこと、人づてに聞いた知人の論文構想のことである。それは「國體」から「国体」へ、というものであった。この、駄洒落のようなタイトルは、しかしながら結構複雑な含蓄をかかえている。「こくたい」と読みを同じくしながら、実体の似ても似つかぬもの・・・と見えて、実は両者が根っこのところでつながっているというオチを連結した物語の構想である。もちろん、この論文構想は、第一義的には、現人神のしろしめす天壌無窮の皇国日本が、敗戦を画期として、人間天皇を国民統合の象徴とする英米流「民主主義国家」に変化(へんげ）したことを、新生民主日本のもう一つの象徴としての国民体育大会＝「国体」を戦前の変幻自在の「國體」と対比させつつ強調することがその本旨である。その意味では、大転換を経験した日本の過去と未来がいずれ同じく「こくたい」と象徴されるイロニーがこの論文筆者得意のよりどころには違いない[3]。しかしながら、そのイロニーは、日本の過去と未来が、ほかならぬ天皇を媒介として連結することによって奇妙に複雑な様相を見せる。論文に曰く「国民体育大会と天皇・皇后両陛下は不可欠の組み合わせであり、その「御臨席」によって国体というスポーツ祭典は「一層輝かしい全国民の祭典」となる。即ち、御臨席を賜ることが、国家大の正統なる行事であることの証しとされるのである」[4]。

「國體」とは戦前の(あらまほしき、つまり存在すべきものとされた）政治体制を指し、丸山眞男流に言えば、さしずめ万世一系の天皇(＝すめらみこと）の権威が制度の到るところに流出、浸潤する融通無碍の政治体である。他方、「国体」はあたかも戦後民主主義を象徴するかのように、自由な「個」としての若き男女がスポーツにおいてその才と精進を競う明朗快活な「民主主義的」ゲームの空間である。その限りではふたつの「こくたい」に共通点は何ひとつない。しかしながら、「天皇・皇后の御臨席」！。もちろん、「御臨席」の主役は現人神ではなくまぎれもない「人間天皇」である。しかし、それではなにゆえ「ここに国民体育大会は、言わば皇族の降臨する庭として、また象徴天皇を推戴する儀式としての性格を一方で濃厚に帯びはじめることに」[5]なるのであろうか。

実のところ、私の想起は、丸山論文の一くだりから大阪市立某高校での「体罰」事件へと浮遊していったのであった。「待遇を改善しつつ虐待する」戦前の心性は、「可愛い生徒の技の向上を願いつつ暴行する」心性へと引き継がれたのではなかったか。そのことは、「國體」から「国体」への移行が「似て非なるもの」への移行に見えて実は天皇制の連続性を確保する一形態であったことと相通じるものではないだろうか。だとすれば、問題は高校の一教諭、一顧問の問題では済まないだろう。日本人が挙げて取り組むべき宿痾(＝長患い）との覚悟が必要なのではないだろうか。

註

１）マルセル・プルースト Marcel Proust(1871-1922)：フランスの小説家。『失われた時を求めて』A la recherche du temps perdu の作者として著名。「マドレーヌ」とは、この小説において主人公が過ぎし昔を想い起こすよすがとなる菓子のことである。

２）丸山眞男(1914-96)：日本の戦後政治学に多大の影響を及ぼした政治学者。

３）実は、「國體」から「国体」へ、はあくまで構想であって、そのままの表題の論文がおおやけにされたわけではない。坂本孝治郎「戦後地方巡幸と国民体育大会」(『学習院大学法学部研究年報』１７、1982 年所収、のち坂本『象徴天皇がやってくる』平凡社、1988 年に転載）参照。

４）坂本論文４７頁。

５）同５１頁。

「世界記憶遺産」をめぐって：山本作兵衛の「炭鉱記録画」より

古賀　崇(人間学部総合教育研究センター図書館司書課程)

「世界記憶遺産(Memory of the World）」というものをご存じだろうか。天理大に近いところでは「古都奈良の文化財」が「世界遺産(World Heritage）」に登録されているが、これとは別である。「世界記憶遺産」は「世界遺産」と「無形文化遺産(芸能、伝承、料理など）」と並ぶユネスコの「遺産事業」であり、書物、文書、絵画などの「記録物」が対象となる。具体的には、フランス人権宣言、ベートーベン第 9 交響曲の草稿や、「グーテンベルグ聖書」などが登録物件となっており、現在は 200 点近くの記録物ないしコレクションが「世界記憶遺産」に登録されている。日本では「世界記憶遺産」の事業は長らく知られず、登録物件も存在しなかったが、2011 年に国内最初の登録が行われた。それは福岡県の筑豊地方で山本作兵衛(1892～1984）という炭鉱夫が描いた「炭鉱記録画」を中心とする、「山本作兵衛コレクション」である。

2013 年 3 月、全日本博物館学会の研究会として「山本作兵衛コレクション」見学会が福岡県の「田川市石炭・歴史博物館」などで開かれ、私も帰省(実家は柳川市）を兼ねて参加した。これが初めて作兵衛の炭鉱記録画などを間近に見る機会となったが、印象的だったのは、危険と隣り合わせの炭鉱の労働・作業の実態や、働く人々とその家族の生活など、幅広い主題が素朴な絵と筆文字によって記録されていたことである。なお、作兵衛の炭鉱記録画はウェブでもいくつか見ることができる(注）。

ところで、「世界記憶遺産」は図書館・博物館・文書館などがかかわる国際的な場では早くから注目されてきた。私がはじめて「世界記憶遺産」の存在を知ったのは 2005 年 8 月の「国際図書館連盟」年次大会(オスロ）で、近年戦禍に見舞われたマリ・トンブクトゥの文書などが紹介された。また、2010 年には韓国ソウルで各国の「世界記憶遺産」を一堂に集めた展覧会に参加したが、当時は韓国で 7 点、中国で 5 件ほかアジア各国でも少なくない登録物件があったにもかかわらず、日本からの登録が皆無だったことに複雑な思いをしたのを覚えている。作兵衛のコレクションが契機となり、国内では現在、京都府舞鶴の引き揚げ記録などが「世界記憶遺産」への登録を目指しているという。

ともあれ、作兵衛の記録画を思い浮かべつつ感じるのは、身近な生活の記録であっても時を経て貴重なもの、そして世界的な価値を有するものになりうる、という点である。人間の営みの中で記録をつくり、それを残していく意義はどこにあるのか。図書館司書資格にかかわる授業の中で、あるいはそれ以外の形でも、今後伝えていければと思っている。

(注）「山本作兵衛氏　炭鉱の記録画」(福岡県田川市）http://www.y-sakubei.com/

「作兵衛コレクション」を多く所蔵する
田川市石炭・歴史博物館

2010 年にソウルで開かれた
「世界記憶遺産」展覧会

山本作兵衛のこと

角　知行(人間学部総合教育研究センター)

本号には図書館司書課程の古賀崇さんが、世界記憶遺産に登録された山本作兵衛の作品についてかかれている。偶然だが、私も作兵衛の絵に関心がある。おなじテーマに相乗りして、今回の責をはたすことにしよう。

昨年 2012 年の春、私は田川市石炭・歴史博物館にでかけてきた。山本作兵衛展が開かれているときいたからである。北九州市の小倉駅からローカル線にゆられて約 1 時間、JR 田川伊田駅のすぐちかくに博物館はある。博物館がたつ石炭公園は、伊田坑の跡地。「あんまり煙突がたかいので…」と炭坑節にうたわれた 45 メートル・2 本の煙突、巨大なクレーンにも似た 23 メートルの竪坑櫓、いくつかの炭鉱長屋などが保存されている(質素な炭鉱長屋には胸がつまりそうだ）。博物館には、坑内のジオラマもあり、過酷な労働環境が一目でわかる。

山本作兵衛は 1892 年、福岡県にうまれた。7 歳(!）のころから筑豊炭田にはいり、以後、50 余年、炭鉱(ヤマ）が閉山になるまで、はたらきつづけたという。これほどながい期間、苛酷な労働にたえたということだけでも、すごいことである。退職後は、日記や記憶をたよりにして、数百枚におよぶヤマの姿をえがき、世におくりだした。2011 年、それらの絵は価値をみとめられて、世界記憶遺産に登録された。同年には『画文集　炭鉱(ヤマ）に生きる―地の底の人生記録』(講談社）も再版されている。絵は坑内の苛酷な労働をえがいたものもあれば、日常生活のささいな出来事を表現したものもある。労働の記録ばかりでなく、生活誌としても実に貴重だ。

私が炭鉱労働に関心をもったのは、ふたつの理由がある。ひとつは、大学時代にはじめてであった社会問題がこれだったということ。レポート課題で上野英信『追われゆく坑夫たち』(岩波新書）をよみ、社会の不合理に目ざめるきっかけになった。もうひとつの理由は、いま「識字」を研究テーマのひとつにしているが、1960 年代に識字運動がおこったのが福岡県で、それは炭鉱の生活とむすびついていたということ。非識字者が生い立ちをつづった識字作文には、炭鉱のくらしがしばしば登場するのである。

画文集の末尾に氏は「これから五十年、あるいは百年の後、孫やその孫たちが、こんなみじめな生活もあったのか、と心から思えるような社会であってほしい。それだけがせめてもの願いであります」とむすんでいる。勲章や顕彰をうける人の人生だけが偉大なのではない。ひとつの仕事を営々とつづけてきた人の人生もまた偉大である。作兵衛の絵は、その真実をつたえている。機会があれば、山本作兵衛の画文集にふれ、この博物館にも、たちよっていただきたいものである(写真は、同館の絵葉書「寝堀り」より）。

オーストラリア版「森に生きる」報告

伊藤　義之(人間学部総合教育研究センター)

2012 年度が第２回目となるオーストラリア版「森に生きる」が本年２月から３月にかけて実施された。本来はオーストラリア短期語学研修と組み合わせたプログラムのはずだが、語学研修への希望者が少なく、急遽「森に生きる」単独の開催となった。それでも「森」への参加者は１回目の２名を大きく上回り、７名。しかも全学部プラス短期留学生から参加申込があり、バラエティ豊かな集団での取り組みとなった。学年もこの２回の開催で、１年から４年までのすべてが出そろった。

今年の活動の特徴はひとことで言うと「雨降って地固まる」。「森に生きる」は従来から吉野で開催されている日本版でもそうだが、おもに「森」の植物との関わりをを中心に伐採などの活動をしている。ところが今回のオーストラリア版は連日雨に降られ、そのため当初予定していた植物との関わりがあまり持てなかった。ところがそれが幸いし動物との触れ合いなど、出発前に思いも寄らなかった多彩な活動が実現し、学生には楽しく充実した日々が送れることになった。詳細は次ページ以下に、学生の感想とともに日記風につづっていく。

日程：2013 年 2 月 23 日～3 月 2 日(7 泊 8 日、うち機中泊１）

	2月						3月	
	23 土	24 日	25 月	26 火	27 水	28 木	1 金	2 土
午前		天理教出張所訪問 オーストラリア到着	在来動物観察学習 オーストラリア	給餌・森林内清掃 動物飼育舎清掃	自然環境学習 亜熱帯雨林見学	（ビーチ・ショッピング等） ゴールドコースト訪問	（スカイウォーク・ワイナリー等） タンボリンマウンテン訪問	オーストラリア出発
午後	日本出発	共同生活開始 ホテル着	州立博物館見学 クイーンズランド	ショッピング 市内観光	コアラサンクチュアリ			日本到着

参加者：7 名(人間学部１名、文学部１名、国際学部１名、体育学部３名、短期留学生１名)

	氏　名	学部	学　科	専攻･コース	学年
1	初田(ハツダ) 有香(ユウカ)	人間	人間関係	臨床心理	2
2	土井(ドイ) 愛未(マナミ)	文	歴史文化	考古学･民俗学	4
3	多久(タク) 詩織(シオリ)	国際	地域文化	アジア･オセアニア研究	3
4	山本(ヤマモト) 貴之(タカユキ)	体育	体育	健康	2
5	馬場(ババ) 絵理奈(エリナ)	体育	体育	教育	3
6	宮本(ミヤモト) 美帆(ミホ)	体育	体育	健康学	4
7	KU(クウ) NATASHA(ナターシャ)	短期留学生			

2 月 23 日(土)

関西空港発ゴールドコースト便の離陸は夜の８時 50 分。余裕を持って午後６時関空ターミナル集合としたが、その 30 分前には全員が集合していた。こういう行事ではたいてい遅れる人がいるが、これは幸先がいい。参加者７名のうち初海外が３人。初飛行機という人もいた。

初めての海外だったので行く一か月前くらいから楽しみでそのことばかり考えていました。飛行機にも 10 時間も乗ったことがなくて、しんどいし大変だということは聞いていましたが、それさえも楽しみでした。（多久詩織)。

８時過ぎには機中の人となり、長旅の出発。飛行機は７時間半のフライトだが、なかなか飛び立たず機内にいるのは９時間ほどだった。満員に近くたいていの学生が左右を人で囲まれた中央席。そのためリラックスした姿勢はとれず、窮屈な姿勢のまま寝ることになった。寝たのか寝ていないのかわからないまま９時間を過ごし、朝早く到着。

2 月 24 日(日)

午前６時半、予定よりやや早く飛行機はゴールドコースト空港に到着。飛行機からターミナルビルまではタラップを降りて、徒歩でという貴重な経験をした。曇っていたが雨でなくてよかった。入国審査もとくに問題なく済む。機内では食事を含めて何もサービスのないプランだったので空港内のカフェで朝食。一人一人が食べたいものを注文し、入国手続き以外では初英語使用。

その後、レンタカーを借り一路ブリスベンを目指す。ゴールドコーストからブリスベンまでは高速道路を使って約１時間半。途中天理教オセアニア出張所に立ち寄り、その後ホテルへ。ホテルは４人部屋を２ユニット使用。コンドミニアム形式で広いリビングと調理道具が何でも揃った台所がある。時差は１時間しかないが、窮屈な姿勢で夜を過ごしたため睡眠不足気味の学生達を休養させ、本日はゆっくりすることにした。夕方からスーパーに買い出しに出かけみんなで夕食の準備。いよいよ共同生活の始まりだ。

何よりもよかったと感じたことはみんなで共同生活ができたことだ。それぞれ違った学年、学科で知らなかったことをいろいろ知ることができ、また一日を共同で過ごすことができて本当に楽しかった。また、自炊するために地元のスーパーで買い物をして、オージーの生活を身近に感じ取ることができたこともよかった。日本と異なる食べ物を見ることができてよかった。(初田有香)

2 月 25 日(月)

いよいよ今日から森での作業の始まりだ。しかし、朝から雨が強く外での作業はできそうもない。我々のプログラムに全面的に協力してくれるブリスベン森林公園のレンジャー、デイビッドに電話。「この雨では予定している森林作業はできそうもないから、レンジャー本部に来い」とのこと。どうなることかと案じながらレンジャー本部に行ったが、杞憂だった。レンジャーは実にたくさんの「雨でもできるプログラム」を考えてくれていた。

今回は天候の関係で「森に生きる」としての活動があまりできなかったのが残念でしたが、森林公園でもワラビーやカンガルー、ターキー、ウォンバットやポッサム、カモノハシといったかわいい動物から、Blue-tongued と呼ばれる青い舌を持ったトカゲや、蛇やカメレオンといった様々な爬虫類なども見ることができました。（土井愛未)

森林公園から帰ったあとは電車で Queensland Museum(博物館)へ。滞在しているホテルから最寄りの駅まで徒歩 10 分。そこから CITY(ブリスベンの中心地）まで１度乗り換えはあったが４駅ほどだった。駅構内にも車内にも全く広告のないオーストラリアの電車は新鮮。どうやって切符を買うのか、どこで乗り換えをしてどこで下りるのか、駅員に尋ねることも英語の勉強になり、車で行っていたのではできない経験ができた。博物館ではそれぞれがテーマを持ってオーストラリアの自然や動植物について学んだ。

2 月 26 日(火)

今日も雨。森林公園ではレンジャーたちの仕事を紹介する 10 分ほどのビデオを鑑賞。「私たちの仕事は森林を管理することではなく守っていくこと(We do not control but manage forests.)」とのレンジャーの言葉が印象に残る。

その後は飼育している各動物の飼育舎の掃除や、本部を取り囲む広い森の倒木の片付けなどをやることになった。このあたりは３週間前の大きなサイクロン(台風）で被害を受けたのだ。「せっかくボランティア活動をやろうと張り切ってやってきたのに、働けないのはかわいそう」という彼らの配慮で、掃除や倒木整理のほか、同公園で飼っているカモノハシにテナガエビを給餌させてもらったり、一ヶ月に一度しかないというパイソン(大蛇）の食事風景を見せてもらったりした。

蛇の食事シーンも見せてもらいました。餌は死んだねずみで少しグロテスクでしたが、餌をあげるのは一ヶ月に一回ということで珍しい光景を目にすることができました。蛇はねずみだけではなく、うさぎも食べるとのことです。(土井愛未)

午後は雨のやみ間があったので市内観光。街なかのレストランで食事をしたところ、ウェイターがとてもフレンドリーな人で我々の前で踊ったりして、楽しませてくれた。あまり日本では見ない光景で、ここにも学生達は異文化を感じたようだ。

私は今回初めて海外に行き、本当に多くのことを学べたと実感しています。日本と海外の文化が違うこと、人柄が違うなど、母国の日本と海外の文化が違う点が多くありました。(山本貴之)

2 月 27 日(水)

今日もやっぱり雨。今日がレンジャーとともに活動する最終日。計画していた外来植物の駆除作業は結局一度もできずじまい。でもその代わり、レンジャーは二台の４ＷＤ車を準備してくれていた。この二台に分乗してレンジャーの作業道を疾駆し、絶景ポイントなどを案内してくれるという。７人の学生のうちに一人、カナダからの短期留学生がいたので一台の車に彼女が乗り込み通訳をしてもらい、もう一台の車は私(伊藤)が通訳をした。

三日目に、レンジャーと国立公園内を車で巡る珍しい機会を得ました。二台の車で行きました。伊藤先生と私は翻訳者でした。難しかったけど、私たちはお互いに助け合いました。私はレンジャーの英語の説明を日本語に換えて、みんなは私の日本語を直しました。いい練習でした。(ナターシャ・クゥ)

出発してみると、サイクロンの影響もあって道路に穴が開いている、木が倒れている。そんな道を、テーマパークのアドベンチャー・ライドを少し激しくしたような運転で進んでいく。少々折れて垂れ下がったり倒れたりしている木に車をぶつけてもレンジャーは「僕の車じゃないからね」と平気の顔。少し酔う学生も出る始末。しかし、その体験は痛快でもあった。絶景ポイントから下界を見下ろすと、雨が降っているところと降っていないところが一望できる珍しい光景が目に入った。レンジャーの講義は気象学から始まって、造山活動などの地学に、そして亜熱帯雨林と乾燥林の違いなど植物学にも及び、鳥と虫の食物連鎖に関する生態学にも触れるなど、幅広いものだった。

レンジャーしか入れないエリアに入って森林をみたり、乾燥した地域での植物、亜熱帯の地域での植物を比べたりもでき、新たな発見でした。また、食物連鎖の関係で鳥が増えすぎたりするのを防ぐため、年に何回かの山焼きをすることなど、初めて知ることがたくさんでとても勉強になりました。(宮本美帆)

レンジャーさんが管理している森を案内してもらった時『鳥の鳴き声で、鳥が鳴いているということは虫が増えているという知らせだから、山を燃やさないといけない』と聞き、私は何も知らなかったので、キレイな鳥の鳴き声だ!としか思いませんでしたが、この鳴き声で森の状態がわかるというのはとても驚きました。まさに「森に生きる」というのを感じた一瞬でした。(多久詩織)

今日は山の中を歩いたためにヒルがたくさん体についた。とりわけ長い間血を吸われていた二人の足からはしばらく血が止まらかった。血を吸われていても痛くもかゆくもないので、気がつかないのだ。レンジャーにバンドエイドと包帯で応急措置をしてもらった。レンジャーには何から何までお世話になり、感謝に堪えない。

そして、いよいよレンジャーとのお別れのとき。この三日間は雨が続き、森の中での作業ができなかったが、その分さまざまな活動をアレンジしてくれ、むしろより貴重な体験を多くすることができた。いろいろと考え、時間を割いてくれたレンジャーたちにお礼を言い、来年の再会を約束してブリスベン森林公園本部を後にする。

午後の行き先はみなで相談した結果、満場一致でコアラ・サンクチュアリーに決定。他のテーマパークなどはお金がかかるという理由でパスしたが、この施設だけは有料にもかかわらず、みんな行きたがった。

今回の旅は全てを通して楽しいことばかりでした。その中でも最も印象に残った体験は、Lone Pine Koala Sanctuary でコアラを抱っこしたことです。コアラの感触はとても柔らかく、そして意外に重いと感じました。また、嗅いだことのない変な匂いもしました。しかしその愛らしさですべてが吹き飛び、癒されました。(土井愛未)

2 月 28 日(木)

今日はこれまでになくいい天気。オーストラリア滞在中唯一のビーチ日和だ。今日はもう作業もない。遅い朝食をとったあと 10 時半にゴールドコーストに向かって出発。途中で給油し、12 時頃サーファーズパラダイス(ゴールドコーストの繁華街）に到着した。まずはビーチ。さんざん波とたわむれた後、展望タワーに上る組とショッピングを楽しむ組に分かれた。どちらの組も今日ばかりは「観光客」を堪能し、満足した気分でブリスベンのホテルに帰宅。

奇しくも今日は土井さんの誕生日。前日から「真夏に迎える誕生日は初めて」とワクワク感を隠せない様子だったが、食後にサプライズ。みんなで土井さんに内緒で用意してあったケーキを取り出し、ハッピーバースデー♪を歌い、心温まるひとときとなった。共同生活も５日となり、おしゃべりは深夜まで続く。日本人の６人には英語に触れる日々だが、カナダ人留学生のクゥさんにとっては日本語に触れる日々だったらしい。

[私は]英語の勉強がいらない代わりに、日本語と日本の文化や生活を学びました。友達はそれを[Japanese Shower]と言う経験だと言いました。旅の間、日本人８人と住んでいたし、日本語を話したり、ちょっとした日本の生活を経験したり、和食を食べたりしました。毎晩、色々なことについて話しました。例えば、早口言葉とか、関西弁とか、だれが一番天然かなど話しました。とても楽しかったです。(ナターシャ・クゥ)

3 月 1 日(金)

今日は活動できる事実上最後の日。貴重な昨日の太陽がどこかにいってしまい、また雨。今日はワイナリーがたくさんあるタンボリン・マウンテン地域に向かって出発。ワイナリーに行く前にスカイウォークという、亜熱帯雨林を樹上から観察できるスポットを見学。

とても感動したのは Skywalk でのジャングル体験です。日本では見ることのできない木や植物、生き物たちでいっぱいで、胸が高なりました。それと同時に、日本でしか見られないものもあるなと、日本の良さも再認識することができました。(宮本美帆)

今夜もみんなでそろって夕食の準備。最後の夜なので、残った米を全部炊いて、みんなでおにぎりを作った。これで明日の朝食は確保できた。物を無駄にしないのはいいことだ。

朝ごはんと夜ご飯を自炊するというのはとても良かった。少し時間はかかるけれど共同生活ならではの楽しみ方であった。(多久詩織)

3 月 2 日(土)

最終日は大雨。ホテルを朝６時 15 分に出発。予定通りに８時にはゴールドコースト空港に着いた。ところが大雨のため、飛行機が飛び立ったのは 12 時過ぎ。最後まで雨にたたられた旅だった。関西空港に到着したのは、予定より２時間遅れの夜８時。予定していた空港バスに乗れない人も出たりしたが、とにかく全員大きな病気やけがもなくすべての活動ができ、無事に帰ってきたのは何よりだった。

森での活動もオーストラリアでの観光も、色々なところに行くことができとても満足のいくもので、1 週間がとても速く感じました。卒業前に最高の時間を過ごすことができ、本当に感謝しています。(宮本美帆)

改めて日本という国は、平和な国だと思いました。今回のオーストラリア研修は、共同生活の面も通して、これからの人生にすごく役に立つ経験になったことと心から思います。(山本貴之)

オーストラリアの森の違いについて知ることができた。日本にはない亜熱帯性雨林とドライなエリアの森の違いを知ることができてよかった。また虫が増えたら森を焼かなければならない、その虫が増えたときに聞かれる多くの鳥の鳴き声などを実際に聞き、オーストラリア独特の森の特徴を知ることができた。(初田有香)

一番の目的の「森に生きる」というのを実際肌で感じ、オーストラリアを楽しむことができたので、この研修に参加して改めてよかったと思っています。(多久詩織)

一人だけの留学生だったけど新しい友達が作れてうれしかったです。あまり英語を話さなかったおかげで、ちょっと日本語が上手になって、今は前よりもっと自信を持っています。(ナターシャ・クゥ)

最後に旅全体を通してひしひしと感じたのは、英語の重要性です。一般的に「日本人も英語ぐらい話せないといけない」という社会になってきています。しかし、正直日本で過ごしている限り英語の必要性は感じないので、英語は大事だとは思いつつも私は英語に対し苦手意識を持っていたのもあり、勉強などは何もしていませんでした。しかし、オーストラリアに行ったことでその考え方は変わりました。やはり英語は話せたほうが絶対にいいと思います。なぜなら、違う国の方とコミュニケーションをとることができたら人生は何倍も楽しくなりそうだ、と感じたからです。(土井愛未)

よかったことは、オーストラリアならではの自然や動物と触れ合えたこと、とくにカンガルーに触ることができたこと 、レンジャーさんが熱心にいろんなことを教えてくれたこと、アボリジニのことを知れたこと、学年や学部の枠を越えて６人の仲間と出会い、たくさん話したり、一緒に生活をしたりすることで新しい考え方をもてるようになったこと 、異国に行くことで、さまざまな人の働く姿を直接見て視野を広げることができたことです。(馬場絵里奈)

CRADLE(クレードル)　第 3 号　2013 年 4 月発行

発行者　伊藤義之　天理大学　人間学部 総合教育研究センター

〒632-8510 奈良県天理市杣之内町 1050　電話・FAX　0743-63-7092　(内線）6111

印　刷　株式会社　春日